

直木三十五全集

2

直木三十五全集

2



大槻傳藏
の立場

示人社

直木三十五全集第2巻

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発行所 東京都文京区水道一―九―一
株式会社 示 人 社

郵便番号 一一二

電話 東京三八二―二四一三

印刷 製本 モリモト印刷株式会社

装幀 イワサキ・ミツル

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第2巻（昭和10年3月20日発行）を用いた。

第二卷目次

南國太平記

呪殺變	泥人形	第一の蹉躓	父子雙禍	兩黨策動	匕首に描く	第二の蹉躓	刺客行	大阪藏屋敷	死闘	南玉奮戦	忍泣き
-----	-----	-------	------	------	-------	-------	-----	-------	----	------	-----

三	二五	四三	五三	八〇	一六〇	二二三	二三三	一五五	一六五	一七九	一九九	二〇八
---	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

二人の主
片手斬り
秘呪相争
崩れる淵
調所の死
地獄相
憤死事件
三人旅
宿命の渦
移り行く
蜘蛛の巣網
流行物
お爲派崩れ
巳地獄
鷹野變
萌出る物
まんじ飢れ

二〇
二二
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二

動揺

四四七

巷騒

四五九

同じ道に

四七三

移り行く

五三三

巷の音

五五五

三つの死

五六五

死の後に

五九九

文珠九助

六二七

江戸の宿

六二七

傳兵衛の死

六九

急訴

六三一

大槻傳藏の立場

六三五

傳藏の略歴

六三五

出世して行く朝元

六三五

嫉まれる傳藏

六三三

亡び行く内藏允

六三八

南國太平記

呪殺變

一ノ一

高い、梢の若葉は、早朝の微風と、和やかな陽光とを、健康さうに喜んでゐたが、鬱々とした大木、老樹の下蔭は、薄暗くて、密生した灌木と、雜草とが、未だ濡れてゐた。

樵夫、獵師でさへ、時々ししか通らない、細い徑は、草の中から、ほんの少しのあか土を見せてゐるだけで、兩側から、枝が、草が、人の胸へまでも、頭へまでも、からかひかゝるくらゐに延びてゐた。

その細徑の、灌木の上へ、草の上へ、陣笠を、肩を見せたり、隠したりしながら、二人の人が、登つて行つた。陣笠は、裏金だから土分であらう。前へ行くその人は、六十近い、白髯の人で、後方のは供人であらうか？ 肩から紐で、木箱を腰に垂れてゐた。二人とも、白い下着の上に黄麻を重ね、裾を端折つて、紺脚絆だ。

老人は、長い杖で左右の草を、掻き分けたり、たゞいたり、撫でたり、供の人も、同じやうに、草の中を注意しながら、登つて行つた。

老人は、島津家の兵道家、加治木玄白齋で、供は、その高弟の和田仁十郎だ。博士王仁がもたらした「軍勝圖」が大

江家から、源家へ傳へられたが、それを秘傳してゐるのが、源家の末の島津家で、玄白齋は、その秘法を會得してゐる人であつた。

口傳玄秘の術として、明かになつてゐないが、醫術と、祈禱とを基礎とした呪詛、調伏術の一種であつた。だから、その修道者として、藥學の心得のあつた玄白齋は、島津重豪が、藥草園を開き、蘭法醫戶塚靜海を、藩醫員として迎へ、ヨーンストンの「阿蘭陀本草和解」一藥海鏡原などが譯されるやうになると、藥草に興味をもつてゐて、隱居をしてから五十六年、初夏から秋にかけて、いつも山野へ分け入つてゐた。

行手の草が揺らいで、足音がした。玄白齋は、杖を止めて立止まつた。仁十郎も、警戒した。現れたのは獵師で、鐵砲を引きずるやうに持ち、小脇に、重さうな獲物を抱へてゐた。獵師が二人を見て、ちらつと上げた眼は、赤くて、悲しさうだつた。そして、小脇の獸には首が無かつた。疵口には、血が赤黒く凝固し、毛も血で固まつてゐた。獵師は、一寸立止まつて、二人に道を譲つて、御明頭をした。玄白齋は、その首のない獸と、獵師の眼とに、不審を感じて

「それは？」と、聞いた。獵師は、伏目で、悲しさうに獸を眺めてから

「わしの犬でがすよ」

「犬が——何んとして、首が無いのか？」

獵師は、草叢へ鐵砲を下ろして、その側へ首の切取られた犬を置いた。犬は、脚を縮めて、ミイラの如くかたくなつてころがつた。疵は頸にだけでなく、胸まで切裂かれてあつた。

「どこの奴だか、ひどいことをするでねえか、御侍様、昨夜方、その岩んところで、焚火する奴があつての、こいつが見つけて吠えて行つたまふ戻つて來ねえで——」

獵師は、うつむいて涙聲になつた。

「長い間、忠義にしてくれた犬だもんだから、庭へでも埋めてやりてえと、かうして持つて戻りますところだよ」

玄白齋は、ぢつと、犬を眺めてゐたが

「よく、葬つてやるがよい」

玄白齋は、仁十郎に目配せして、また、草叢をたふきながら歩き出した。

「氣をつけて行かつし——天狗様かも知れねえ」

獵師は、草の中に手をついて、二人に、御叩頭をした。

一ノ二

細徑は、急ではないが、登りになつた。玄白齋は、うつむいて、杖を力に——だが、目だけは、左右の草叢に、そゝがれてゐた。小一町登ると、左手に蒼空が、果てし無く擴が

つて、杉の老幹が蠟々と聳えてゐた。そこは狭いが、平地があつて、谷間へ突出した岩が、うづくまつてゐた。

大きく呼吸をして、玄白齋は、腰を延すと、杉の間から、藍碧に開展してゐる鹿兒島灣へ、微笑して

「よい景色だ」

と、岩へ近づいた。そして、海を見てから、岩へ眼を落すと、すぐ、微笑を消して、岩と岩の周圍を眺め廻した。

「焚火を、しよりましたなう」

仁十郎が、かういつたのに答へないで、岩の下に落ちてゐる焚木の片を拾ふ

「和田——乳木であらう」

と、差出した。和田は手にとつて、すぐ

「桑でございますな」

乳木とは、折つて乳液の出る、桑とか、柏とかを兵道家の方で稱するのであつた。

玄白齋は、岩へ、顔を押當てるやうにして、岩から、何かの匂を嗅いでゐるが

「和田、嗅いでみい」

仁十郎は、身體を岩の上へ曲げて、暫く、鼻を押しつけ

てゐるが

「蘇合香？」

と、玄白齋へ、振向いた。玄白齋は、ちがつた方向の岩

上を、指でこすつて、指を鼻へ當てて

「龍腦の香もする」

和田は、すぐ、その方へ廻つて鼻をつけて

「さう、龍腦」

と、答へた。

「これは、鹽だ」

玄白齋は、白い粉を、岩の上へ、指先でこすりつけてゐ

た。仁十郎は、谷間へのぞんだ方の岩の下をのぞいてゐた

が、急に、身體を曲げて、手を延した。そして、何かをつ

まみ上げて、玄白齋へ示しながら

「先生、蛇の皮が——」

と、大きい聲をした。玄白齋は、險しい眼をして

「人髪は？」

仁十郎は、あたりを探して

「髪の毛はないか」

二人は、向き合つて、暫くだまつてゐた。玄白齋は、焚

火をしたため、黒く焼けてゐる岩肌を眺めてゐたが

「和田、この岩の形は？」

「岩の形？」

「鈎召金剛爐に似てゐるであらうかな」

和田は、ちらつと岩を見て、すぐ、その眼を玄白齋へ向

けて

「似てをります」

と、答へた。

「牧は、江戸へ上つたなう」

「はい」

玄白齋は、眼を閉ぢて、暫く考へてゐたが

「阿毘遮魯迦法によつて、忿怒饒曼德迦明王を祭つた、人

命調伏ちや。この法を知る者は、牧の外にない」

呖くやうにいつたが、その眼は、和田を、鋭く睨んでゐ

た。和田は、自分がとがめられてゐるやうに感じて、面を

伏せると

「この品々を、拾つて——」

玄白齋は、岩の上の木片、蛇皮を顧で差した。和田が拾

つてゐると

「他言無用だぞ」

と、やさしくいつた。その途端——下の方で、それは、

人の聲とも思へぬやうな凄い悲鳴が起つてすぐ止んだ。

一ノ三

二人も、ちらつと、眼を合せて、すぐ、全身を耳にして、

もう一度聞かうとした。何んのための叫びか、もう一度聞

えたなら、判斷しようとした。暫く、黙つて突立つてゐた

二人は、もう一度眼を合せると、和田が

「斬られた聲でせうな」

玄白齋は、答へないで、下の方へ歩き出した。

「四邊に氣を配つて——油斷してはならん」

玄白齋は、脚下の岩角を、たどく踏みつゝ、和田に注意した。

「今のは獵師でせうか」

「さうかも知れぬ」

二人の脚音と、衣ずれの外、何んの物音もない深山であつた。あんな大きい、凄ひ悲鳴が起らうとは、神も思へないくらゐに、靜かであつた。

二人は、聲がしたらしいと考へた場所へ近づくと、歩みを止めて、四方を眺めた。そして、小聲で玄白齋が

「この邊と思ふが——」

と、振返ると

「探しませう」

和田は、肩から掛けてゐた藥草の採取箱を鉤さうとした。

「下手人が、未だ、うろついてをらうもしれぬ。用心して——」

和田の置いた箱のところへ杖を立てて、玄白齋は、草のそよぎ、梢の風にも、注意した。和田は、杖で草を、枝を分けたがら、薄暗い木の下蔭へ入つて行つた。玄白齋は

「徑から、餘り遠いところではあるまい」と、背後から、聲をかけた。和田は、小徑を中心に、左

右の草叢へ、森の中へ、出たり、入つたりしてゐたが、暫く、身體が見えなくなると

「先生、先刻の獵師です」

落ちついた大聲が、小半町先の草の中から起つた。そして、草を揺がして、陣笠が、肩が——和田が、小走りに戻つて來た。

二人が、小徑から覗くと、背の着物だけが少し見えてゐた。近づくくと、蟲が、飛び立つた。死體は草の間にうつ伏せになつて、木の間からの陽光が斑に當つてゐた。

着物が肩から背へかけて切裂かれて、疵口が、慘たらしく、赤黒い口を開けてゐた。肉が、左右へ縮んでしまつて、肩の骨が白く見えてゐた。着物も、頸も、下の草も、赤黒く染まつて、疵口には蛇が止まつて動かたかつた。

「犬に、鐵砲は？」

玄白齋は、髻と、頤とを掴んで、獵師の顔を検めてから、立上つて、和田にいつた。

「徑から、こゝへ逃げ込んだのだから——」

和田は、徑の方を見て、二三步行くと

「この邊に——」

と、呟いて、左右の草叢を、杖で、掻き分けた。

玄白齋は、杖の先で、着物を押し擠げ、疵口を眺めて、血糊を杖の先につけてゐた。和田が

「見つかりました」

と、徑に近い草の中から、こつちを見た。

「血が、十分に凝固つてゐぬところを見ると、斬つて間もないが——一刀で、往生しとる。餘程の手利きらしい」

玄白齋は、獨り言のやうに、和田を見ながら呟いて、和田が

「下手人は、未だ遠くへ走つてをりますまい、探しませうかの」

と、いふと

「見つけたとて、捕へられる對手ではあるまい」

さういつた玄白齋の眼は、屑は、決心と、判斷とに、鋭く輝き、結ばれてゐた。

一ノ四

島津家に傳へられてゐる呪詛の術は、治國平天下への一秘法であつて、大悲、大慈の佛心によるものであつた。私怨を以て、二人、二人の人を殺す調伏は、呪道の邪道であり、效驗の無いものである。假へば、一人の敵將を呪ひ殺すといふことは、正義の味方を勝たしめることで——それは、一國一藩が救はれ、ひいては天下のためになることで——つまり、小の蟲を殺して、大の蟲を助ける、といふのが、調伏の根本精神であつた。

だから、術者は、外に憤怒の形を作り、殘虐な生機を神

佛に供し、自分の命をさへ、佛に捧げて祈りはしたが、それは、その調伏を成就して、多數の人々が幸福になれば、生機は佛に化すといふ決心と信念とからであつた。

そして、その信念は、完全に、精神を昂揚し、普通の精神活動以上の不思議さを、常に示した。それは、小さい怨みとか、怒りでは到達のできない信念で、正義に立たなければ現れないものであつた。

さうして、加治木玄白齋にしても、代々の兵道家にして、長い、大きい、深い、苦痛と、修練をして、その秘術を會得するのであつたから、その智慧、知識、人格から見ても、一人の人に私怨をもつて、調伏を行ふやうな愚かな人間ではなかつた。そんな人間では、修行のしきれる呪術ではなかつた。

「藥草取りは？」

玄白齋が、戻り道の方へ歩きかけたので、和田が、かう聲をかける

「止めた——戻らう」

と、玄白齋は答へて、もう、左右の草叢へは、何んの注意もしないで、うつむき勝ちに、足早に歩き出した。和田は玄白齋の心がわからならしく、忠實に、草の中の藥草の有無を、杖の先で探しながら、黙つてついて行つた。

だん／＼木が疎になつて、木床峠へ出る往來が近くなつ

た。右手の前方に、櫻島が、朗らかな初夏の空に、ゆるやかに煙をあげてゐた。

「仁十」

「はい」

玄白齋は、かういつたまゝ、また、暫く黙つてゐた。

「先生——何か？」

「ふむ——事によると、なり」

何を考へてゐるのか、玄白齋は、なか／＼語り出さなかつた。

「何か、大事でも——」

「うむ、容易ならぬ企てがあると、わしは思ふが」

と、いつて、突然、振向いて

「近々に、牧に逢つたかの」

「一向に——」

「噂をきかぬか」

「たゞ、江戸へ参られましたと、それだけより存じませ

ん」

牧仲太郎とは、玄白齋の後継者で、牧に職を譲つて、玄

白齋は、隠居をしてゐるのであつた。

「もしか、牧が——」

玄白齋が、呟いた。

「牧どんか？」

「いゝや——」

玄白齋は、首を振つて

「今日のことは、和田、極秘ぢや」

街道へ出てからも、玄白齋は、考へながら歩いてゐる

しく、いつものやうに、左を見、右を見しなかつた。和田

は、大抵の雨にも、道にも、薬草採りをやめない老師が、

急に歸るのを考へると、何か、大變なことが起つてゐるやうに感じられた。

一ノ五

（牧より外に、あの秘法を行ふ人間はない筈だ——牧の仕

業としたなら——何んのために——誰を——）

玄白齋は、險路も、汗も感じないで、考へつゞけた。

（もし、自分の考へが、當つてゐたとしたなら——島津家

の興廢にかゝはる——）

玄白齋の考へは、次のやうなことであつた。

當主齊興の祖父、島津重豪は、英雄にちがひなかつた。

彼は、シーボルトが来ると、第一に訪問した。それから、

大崎村に藥園を作つたし、演武館、造士館、醫學院、臨時

館の設立、それによつて、南國片僻の鹿兒島が、どんなに

進歩したか？

彼自らは「琉球産物誌」「南山俗語考」「成形圖説」を著し、

洋學者を招聘し、鹿兒島の文化に、新彩を放たしめたが、然

し、それは悉く、多大に金のかゝることであつた。

また重豪は、御國風の蠻風を嫌つて、鹿兒島に遊廓を開き、吉原の大門を、模倣して立てた。洋館を作つた。洋物を買つた。さうして、最後に、彼の手元には、小判はおろか、二朱金一つしかないことさへできるやうにもなつてしまつた。

土は、鐐を賣り、女は、簪を賣つて獻金し、十三ヶ月に渡つて、食祿が頂戴できないまでに窮乏してしまつた。そして、彼は隠居をした。

次代の齊宣も、士分も、人民も、この重豪の舶來好みによつて、苦難したことを忘れることができなかった。だから、齊宣は、秩父太郎季保を登用して、極端な緊縮政策を行つた。然し隠居をしても、潤達な重豪は、自分に面當のやうなこの政策に、激怒した。そして直ちに、秩父を切腹させ、齊宣を隠居させ、齊興を當主に立てた。

齊興は、茶坊主笑悦を、調所笑左衛門と改名させて登用し、彼の劇策によつて、黒砂糖の専賣、琉球を介しての密貿易を行つて、極度の藩財の疲弊を、あざやかに回復させた。

然し積極政策では、重豪と同じ齊興ではあつたが、大の攘夷派で、従つて極端な洋學嫌ひであつた。尊王派の頭領として、家來が

「西の丸、御炎上致しました」

と、いつた時
「馬鹿つ、炎上とは、御所か、伊勢神宮の火事を申すのだ。たゞ、焼けたと申せ」

と、怒鳴る人であつた。家來が恐縮しながら

「就きまして、何かお見舞獻上を——」

「獻上？ 獻上とは、京都御所への言葉だ。未だ判らぬか、此奴。何んでもよい、見舞をくれてやれ」

ベルリが來た時、江戸中は、避難の荷物を造つて騒いだ。その時、三田の薩摩邸は、徹宵、能樂の鼓を打つてゐた。翌日、門に大きい膏藥が貼つてあるので、剣がすと、黒々と天下の大出來物と書いてあつた。

齊彬は、この父の子であつた。だが、幼少から重豪に育てられて、洋學好みの上に、開國論者であつた。そして、自然の情として、父齊興とは、親しみが淡かつた。その上に、幕府は、齊彬を登用して、對外問題に當らせようとして、齊興の隠居を望んでゐた。齊興が齊彬をよく思はないのは、當然である。

そして、齊興も、家中の人々も、齊彬が當主になつては、また、重豪の轍を踏むであらうと、憂慮した。木曾川治水の怨みを幕府へもつてゐる人々は、幕府が、齊彬を利用して、折角の金をまた使はせるのだとも考へた。

さうして、齊彬の生母は死し、齊興の愛するお由羅が、その寵を一身に集めてゐた。そして、お由羅の生んだ久光は、聰明な子の上に、齊興の手元で育てられた。

(齊彬を廢して、久光を立つべし)

それは、齊彬の近侍の外、薩藩大半の人々の輿論であつた。玄白齋は考へた。

(齊彬を調伏して、藩を救ふ——然し——)

老人は、山路を、黙々として、麓へ急いだ。

一六

黙々として歩いてゐた玄白齋が、突然

「和田」

と呼んで立止まつた。和田が、解しかねる玄白齋の態度を、いろいろに考へてゐた時であつたから、ぎよつとして

「はい」

と、周章して、返事して、玄白齋の眼を見ると

「その邊に、馬があるか、探してなう」

かういひながら、腰の袋から、錢を出して

「一つ走り、急いで戻つてくれぬか」

和田は、何か玄白齋が、非常の事を考へてゐるにちがひない、と思ふと、ほんの少しでもいゝから、それが、何んなことだか、知れたかつた。それさへ判れば、自分にも多少の智慧もあり、判断もつくと思つた。それで

「御用向は？」

「千田、中村、齋木、貴島、この四人の在否を聞いてもらひたい——居つたら、それでよい。もし居らなんだ節は——」

玄白齋は、聲をしごきながら

「何時頃から居らぬか？——何處へ行つたか？ 誰と行つたか？——それから、便りの有無——よいか、何時、誰と、何處へ行つたか？ 便りがあつたと申したなら、何時、何處から、と、これだけのことを聞いて——」

玄白齋は、小首を傾けて、まだ何か考へてゐたが

「二人も、もし、居らなんだなら、高木へ廻つて、高木を邸へ呼んでおけ。それから」

玄白齋は、和田の眼をおつと見ながら

「何氣なく、遊びに行つたといふ風で、聞きに行かんといかん」

玄白齋は、かういつて、靜かに左右を見た。そして、低い聲で

「收は齊彬公を調伏してをらうも知れぬ」

和田は、口の中で、はつといつたまゝ、うなづいた。

「わしの推察が當つて、もし、貴島、齋木らが四人ともをらなかつたなら、一刻も猶豫ならん。すぐに延命の修法だ」

「はい」

「齊彬公の御所業の善惡はとにかく、臣として君を呪殺す

ることは、兵道家として、不違、不忠の極ぢや。君の惡業を諷めるには、別に道がある。もし、牧が、軍勝の秘呪をもつて、君を調伏してをるとすれば、許してはおけぬし、左はなくとも、秘法を行つてゐる上は、何んのために行つてをるか、聞きたゞさぬと、わしの手落になる」

和田は、玄白齋の考へてゐたことが、すつかり判つた。そして、判つた以上、すぐに、命ぜられた役を、出来るだけ早く果したいと、氣が、急いできた。それで、大きく、幾度もうなづいて

「それでは、一走りして。谷山には、馬がござりませうから——」

「わしも急ぐ——」

和田は、木箱を押へて

「お先きに」

と、いふと

「箱を——」

と、玄白齋は、手を出した。

「はつ——恐れ入ります」

和田は、急いで採取箱を肩から卸して、手渡すと、一禮して走り出した。土煙が、和田と一緒に走り出した。

一ノ七

芝野の百姓小屋が、點々として見えてきた。和田仁十郎

は、肌膚をべつとりと背へくつつけ、汗を拭き、小走り

(馬——馬)

と、思ひながら、馬の動きを、馬の影を求めてゐた。一刻も早く急ぎたかつたし、暑かつたし、心臓も、呼吸も、足も

(早く、馬を)

と、求めてゐた。土埃が、額へまで、こびりついた。

「この邊に馬がないか」

雜貨を賣る店へ怒鳴つて立止まつた。

「馬？」

と、店先にゐた汚い女が、首を振つて

「谷山まで、ござらつしやらぬと、この邊には、無いですよ」

「済まぬが、水を一杯」

仁十郎は、肩で呼吸をしながら、やう／＼これだけいつ

た。

「水なら——たんと——」

女は、薄暗い勝手から、桶をさげて來た。和田の前へ置

いて、容器を取りに入つた。和田は、身體を曲げると手で

掬つて、つゞけさまに飲んだ。女が、茶碗を持つて、小走

りに來ると

「忝けない」